

肝っ魂おばさん

元埼玉大学理事 今野 耕作

梅雨明け前日の七月十七日のことだった。浦

和駅のホームのベンチに物静かな老女がいた。もう、八十代だろうか。風交じりの雨も気にもせず、私の隣に座って文庫本を読み続けている。

少し遅延した十一時発の宇都宮行きの列車が到着すると、二人は優先席でまた隣り合わせになり、小一時間が過ぎると、列車は小山駅に着いた。彼女は初めて本から目を離し、一休みしている。私は勇気を出し、「面白い本ですか？」と声を掛けると、少し戸惑って、「こんな本」と、中表紙を見せてくれた。

芝木好子の隅田川暮色、と言う本だ。下町育ちの私には気になる表題だ。「その本はどんな本ですか？」と尋ねると、「景色が目浮かぶ本ね。興味があつたら、あなたも読んでみて」と、につこり笑って話が続いた。

「私は、絵本の読み聞かせをしているの。楽しい仕事よ。好きな本は、かこさとしさんと、アーノルド・ローベルかな」。「ああ、カラスのかこさとしさんね」と、私が相槌を打つと、「そうそう、からすのパンやさん、あの本は絵がしっかりしていて、飽きない本ね」と声が弾みだした。

「私は絵描きだから絵本が大好き。子供たちも、良い絵は好きね。でも、詩の読み聞かせも喜びますよ。谷川俊太郎さんの詩が一番ですね。大人の人も谷川ファンの方が多くて、人気があるの。易しい言葉なのに、なぜか心に響くのね。

それと、阪田寛夫さんの詩。子供たちが喜ぶの。子供が口ずさみたくなる詩なのかしらね」と少し不思議そうな眼差しをした後、身内の話になった。

「主人と二人は美大出なの。同じ職場で知り合ったのだけど、主人は今、仕事よりボランティアにばかり夢中で、ちよつと困っていてね・・・」。夫婦がそろって美大出？私はもしかと思つて探りを入れた。

「私が通った高校はとある美大の隣で、塀を乗り越えて、大学食堂のカツカレーを食べに行きました。キャンパスでは、制作中の彫刻を見るのも楽しくて・・・」と話し出すと、「あなた、もしかして上野高校？」と彼女は目を丸くして私の言葉を遮った。

「そう、上高です。するとお二人は東京芸大？」

「えつ、偶然ね。私は日本画、主人は彫刻です。あなたも大浦食堂にお世話になったの？」

「校則では芸大の食堂は使えなかったのですが、あのお姉さんが大好きで・・・」「あの人忘れられない人ね。芸大では、肝っ魂おばさん、と言っていたの。すごい人だったわ。何時も学生の味方で」

「芸大では、肝っ魂おばさんでしたか。高校では大浦のお姉さん、と言っていました。男子生徒にはすごい人気で、クラスメイトの一人が、小遣いのない私に、カツカレーを食わしてやると言つて、あのお姉さんを紹介してくれたんです」

「そういう時代だったわね。貧乏でも誰かが

助けてくれる世の中だったのね。貧乏画学生の
助っ人があの肝っ魂おばさんよ。芸大生には、金
が無ければツケにしてくれたし、ご飯代しかな
い人にはカレーをちよつと添えてくれたりしたの
ね」

「そうそう、ソースだけで食べるソーライスも
美味しかった」

「ソーライスもあつたわね。私なんか、肝っ魂
おばさんに会っただけで楽しくなったの。何時も
やさしい方で、底抜けに明るい人で……。今は、
主人も私もあの時のおばさんの様に明るく生き
ようと思っているの。あらあら、もう終点の宇都
宮よ」

二人は、慌てて、ホームに降りた。「じゃあ、
お元気で」と別れると、妹が待っている改札口が
目の前にあつた。